



山梨県におけるブドウ病害虫防除暦作成の考え方

山梨県果樹試験場 **鶴田あかね**

はじめに

本県の果樹栽培は周囲を山々に囲まれた甲府盆地および盆地周辺で行われている。盆地特有の内陸性気候のため、長い日照時間や少ない降水量、昼夜の寒暖差が特徴的であり、果樹栽培に適した地域である。江戸時代に本県で生産されていた代表的な八つの果物（ブドウ、ナシ、モモ、カキ、クリ、リンゴ、ザクロ、クルミ）を「甲州八珍果」と称しており、本県で古くから果樹栽培が行われていたことがわかる。現在は、ブドウやモモ、スモモ、オウトウ、カキなど多くの果樹品目が栽培されている。2024年の山梨県におけるブドウの結果樹面積は3,790 ha、収穫量は43,600 tと、全国一の大産地であり、全国生産量の約3割を占める（農林水産省統計、2025）。

近年、全国的にもブドウの生産が盛んとなっており、各地で様々な品種の開発や栽培が行われている。本県で栽培されてきた品種の動きを見ると、1980年代まではデラウェアが栽培面積の半分程度を占めていたが、徐々に大房系品種が増加し、1998年ごろには「巨峰」や「ピオーネ」等（以下巨峰群）が主力品種となった。その後2012年ごろから「シャインマスカット」の生産が盛んになり、現在では生産量の半分を超えるようになった。その他、本県では「シャインマスカット」を親に持つ県オリジナル品種「サンシャインレッド」や大粒の黒色系ブドウ「甲斐キング」などの有望品種も積極的に現地に導入されている。本県のブドウ栽培は露地栽培が中心で早場産地ではカサかけ栽培、中間～遅場産地は有袋栽培が主体となっている。

本県では、病害虫防除の指針として「果樹病害虫防除暦」（以下、防除暦）が作成され、生産現場での指導に活用されている。防除暦には栽培上問題になる病害虫に対応した防除が記載されており、果樹の安定生産には必須である。防除暦には、時期別のスケジュール散布欄以外にも薬害の情報などが網羅されている。特に近年は、

突発的な豪雨や長雨、高温などの異常気象により病害虫の発生が目立っており、より一層防除暦の重要性は高まっている。

ここでは、本県における防除暦作成当初から現代に至るまでの経緯や考え方を述べる。

I 防除暦作成の歴史

防除暦の作成にあたっては、JA全農やまなしや県内各JA、山梨県植物防疫協会、公益社団法人山梨県果樹園芸会（以下、園芸会）などの関係機関と県関係者（行政所管課、試験研究機関、普及センター等）が協力し、その年の病害虫の発生状況を考慮して、毎年内容の見直しを行っている。防除暦の変遷は本県の生産者団体の組織改編と密接に関係している。主な生産者団体として、1946年に山梨県果実協会、1960年に山梨県果実販売農業協同組合連合会（以下、果販連）、1970年に山梨県果実農業協同組合連合会（以下、果実連）と組織再編がなされていった。

山梨県果実連史（山梨県経済事業農業協同組合連合会、1993）によると、本県で最初に防除暦が作成されたのは1948年であったとされる。当時、山梨県果実協会の発足当時に「果樹栽培指針」が作成されており、その中に防除暦が記載されていた。当時は県試験場が内容について見直しを2年ごとに行っていた。1961年には県が編集し、園芸会とともに果販連も印刷発行することになった。1968年からは新農薬や病害虫に対応するために防除暦を毎年改訂することになり、1970年からは果実連が主体となった。その後さらに組織再編があり、2000年代からJA全農やまなしが主体となり、現在に至る。

このような変遷はあったが、主な編成方法や編成者は変わることなく、これまで経過してきた。果実連が1972年に作成したブドウ防除暦は現地で栽培されている品種を考慮し、「デラウェア」、ハウス「デラウェア」、甲州、「ネオマスカット」、ベアリーA、「巨峰」の6種類であった。時を経て、現在のブドウ防除暦は「デラウェア」、ハウス「デラウェア」、ハウスブドウ（「巨峰」・「ピオーネ」・「シャインマスカット」）、巨峰群、「シャインマスカット」等、「甲

The Concept of Grape Pest Control Calendar in Yamanashi Prefecture. By Akane TSURUTA

（キーワード：ブドウ、防除暦、病害虫、山梨）